

# 文化

▼ヤマガラの巣  
一枚の地図を展(ひら)  
げている。何日か前に、家  
の郵便受けに入っていた。  
亡くなった祖母と、「ヤ  
マガラのおみくじ」を見て  
いたのは、いつ頃のことだ  
ったのだろう。

新聞紙大の「奈良市詳  
細図 飛鳥校区区域図」に  
見入りながら、記憶の先の  
道すじをたどっている。

行き止まりのようになつ  
ている道のかどに、屋台と  
いっていいのか、一軒の露  
店が出ていた。鳥居と賽銭  
(さいせん)箱とお社(や  
しろ)のミニチュアのセッ  
トがあり、スズメのよくな  
鳥が丸太を並べた参道をち  
ょんちょんと踏んで、神殿  
の扉の中から、おみくじを  
引いてくる。

あれは、春日若宮さんの  
「おん祭」の日でもなく、  
近くの町の夏の夜店とも違  
う、じく普通の日だった。  
ヤマガラという鳥の名は、



## 民俗通信

25 西村 博美

### 奈良の町の「辻子と突抜」

(上)

に感心したモースの話が、森鉄三の「明治東京逸聞史(1)」で触れている。

(平凡社東洋文庫)に出でる。

明治六(一八七三)年七月、  
添上郡奈良中院町極樂院(元  
興寺)を借用して開校された  
「」ただけの芸を仕込むの  
には、無限の忍耐が必要だつ  
たうと、モースはいつてい  
る。

「奈良市史(通史三)によ  
り、「」ただけの芸を仕込むの  
には、無限の忍耐が必要だつ  
たうと、モースはいつてい  
る。

近世の奈良町  
表題の「辻子(すじこ)と突抜(つばぬけ)」まで行きつく  
ことができる。〔奈良市史〕社寺  
編)。

同書の「元興寺町」の項にも  
「」の小川の源は高畠領より  
流れ下つて草小路築地内町川  
あり、小川の流れる町。

山辺字鳴川に出る」と出で  
る。東方に人家なく木戸門が

祖母から聞いて知った。「ぼ  
うれ、こ褒美(ほめび)」にア  
サの実をもつてゐるやう」と  
祖母が言う。  
いま「広辞苑」を引いてみ  
ると、「山雀(スズメ目シ  
ジュウカラ科の鳥。敏捷(び  
んしょう)・伶俐(れいり)  
で、籠鳥(ろうちよう)とし  
て愛玩(がん)、神社などで

大森塚を発掘したあのウ  
イリアム・モースである。彼  
が見たのは、もちろん「奈良」  
ではなく、東京の淺草、明治  
十五(一八八二)年のことだ  
という。

▼飛鳥小学校とならまち  
表題の「辻子(すじこ)と突抜(つ  
ばぬけ)」といふが、いま一般に「な  
らまち」と呼ばれている一帯  
は、もともとこの大部分がか  
つて元興寺の境内地であった  
ことが、発掘成

江戸期の奈良町は「奈良奉  
行」の支配するといふことであ  
った。

「」の奈良町奉行で、  
細井因幡守は、当時(享保十  
一~十三年)の奈良町奉行で、  
細井因幡守は、当時(享保十  
一~十三年)の奈良町奉行で、  
江戸期の奈良町は「奈良奉  
行」の支配するといふことであ  
った。

そんな中に「元興寺」は、平城  
京左京(外京)五條七坊の東南  
寄りで、北は元興寺に接して  
おり、鍵城寺(れんじょうじ)  
はその後身ともいわれる。

寺地の中心を東西に広い道  
路が貫通して、いまとなつて  
は、もとの伽藍の全容は確認  
しがたい。(〔奈良市史〕社寺  
編)。

筆者はこの町に育ち、成人  
したが、もうそのころ既に暗  
渠(きょ)になつていた細流が

りを歩いてみたい。

(にしむら・ひろみ=詩人  
奈良民俗文化研究所研究員)

=トの頃つづく=

## ならまちの成り立ち



ならまちの家並み (奈良市紀寺町)  
=筆者撮影

おみくじをよく鳥として親し  
まれた」とある。

「飛鳥小学校について」は、  
「新ならまちの成り立ち」は、  
「笠置山と土俵」(令和二  
年)。

おみくじをよく鳥として親し  
まれた」とある。

「飛鳥小学校について」は、  
「新ならまちの成り立ち」は、  
「笠置山と土俵」(令和二  
年)。

おみくじをよく鳥として親し  
まれた」とある。

おみくじをよく鳥として親し  
まれた」とある。

おみくじをよく鳥として親し  
まれた」とある。

おみくじをよく鳥として親し  
まれた」とある。

おみくじをよく鳥として親し  
まれた」とある。

おみくじをよく鳥として親し  
まれた」とある。